

テーマ「文が書けるようになる秘訣」

■「センス」は言い訳

文章をスラスラ書ける人、整った文章を書ける人を見て、「上手に書けるのはセンスがあるから」と決めつけ、文章を書くことが苦手である自分を納得させようとしていませんか？なんでもそうですが、「センス」や「才能」をできることの理由に当て込んでしまえば、その先の成長や結果は期待できなくなります。

文を書くことは「センス」や「才能」は一部のことで、文を書くことを正しく理解すれば、具体的なトレーニングも見つかります。今回はその辺りの内容です。

■文章のほとんどを占めている内容は？

**自分の考えだけを書きなさい  
とは誰も言っていません！**

「自分の考えを書きなさい」という指示がされます。そうすると、「自分の考え」を「考える」という謎の無限スパイラルに陥る人がいます。結局、「自分の考えがないので書けない」と困り果ててしまうのです。物語でも評論、説明文をよく読んでください。そこに書かれているのは、感情や考えだけでしょうか。そこは文章全体のわずかな量なのです。では、文章には何が書かれているのでしょうか。

■ある“呪縛”

**人はその内側に表現したいことをたくさん持っているのか？**

小学校の作文の授業で「自分が思うことを好きに書いてみな」と言われたことはありませんか？そこで、書こうとしても自分は何も書けず、どうしようかと困ってしまったことはありませんか？

子どもであろうが、大人であろうと、人はそうそう人に伝えたいと思うことなく持っています。先の指示は言い換えれば「何か書いてよ」ということで、その「何か」なんてみんな持っていないのです。

■結局、文を書くというのは…

**出来事、事実、知識を書くトレーニングをしていますか？**

文が書けるようになる秘訣は、目の前の出来事をまずは自分の言葉にする力を蓄えることです。そのトレーニングは自宅のどの部屋でもできます。自室でも、ダイニングでも、キッチンでも、トイレでも、自分が目に見える様子をまずは言葉にして、“実況中継”してみてください。自室の本棚だけを見ても何でも言葉にできますよ。文を書くというのは、結局のところ出来事、事実、知識を書くことがほとんどなのです。

■表現力？

**巧みで、美しい文が書けることを「高い表現力」というのか？**

文を書くというのは「大喜利」をするということではありません。巧みな比喻を用い、きれいに整えることをもって「高い表現力」とするのは思い込みです。

学校の国語の教科書の文章をご覧ください。そんな大喜利的な文はほとんどありません。国語の教科書に書かれている文はどのように書かれた文でしょうか。そこに着眼しなければ「高い表現力」は見いだせないのです。

■まとめ

**具体的なトレーニング**

その日の出来事だけを記す日記を週に3日ぐらい書いてみてはどうでしょうか。感情や考えなどいりません。純粋に記録だけを自分の言葉で書いていくのです。

相手に詳しく物事を説明する会話トレーニングをしてみませんか？

相手の言葉に耳を傾け、その内容に沿うことをきちんと答えてみませんか？